卑弥呼の訓み方

『長田夏樹論述集（下）』第 27 章
（原載：『科学朝日』第 38 巻第 2 号，1978 年 2 月）

この論文は『魏志』倭人伝中の「卑弥呼」をヒムカと読むべきことを論じたものである。本論文は 3 節よりなる。

第 1 節は方法論である。『魏志』倭人伝に記された言語、つまり倭国語には日本語と類似する特徴が見られることから、倭国語が日本語の先祖であることを確認する。そして、古い文字資料をできる限りそろえ、かつ音韻変化の法則性をたどることによって、倭国語の様相を明らかにすると述べる。

第 2 節は日本語の古い資料によって上古日本語（4〜7 世紀）の方言的差異を論じる。702 年に記録された「大宝二年戸籍帳」の美濃籍帳・筑紫籍帳と『日本書紀』（720 年）の歌謡とを比較し、サ行音の表記に用いられた仮名において、中央[ts]、筑紫[s]、東国[ɣ]のような音韻対立が見られることを指摘する。

第 3 節は『魏志』倭人伝中の訳音の読み方を論じる。「卑弥呼」の「呼」、「伊都」の「都」、「卑奴母離」の「奴」、「多模」の「模」、「末盧」の「盧」を、『魏志』が基づいた 3 世紀の洛陽音に従って読むならば、それぞれ「カ」、「タ」、「ナ」、「マ」、「ラ」であるとする。そして「卑弥呼」をヒムカと読み、卑弥呼と九州の日向との関連性を指摘する。また、倭国語のサ行音が[s]であることから、倭国語と上代日本語との断絶を示唆する。

本論文は一般向けに分かりやすく書かれたもので、内容的には「邪馬台国の言語」（下巻第 20 章）と重複するところが多い。『科学朝日』1978 年 2 月号の特集「『邪馬台国』の科学」に「日向に関連あるか女王卑弥呼」として掲載された後、『邪馬台国の言語』（学生社，1979）に収録された。なお、『科学朝日』および『邪馬台国の言語』の段階では、『論述集』で割愛された「紀元前 14 世紀ごろのウガリト王国」の地図、江田船山古墳大刀の写真、大宝二年戸籍帳の一部の写真が収められている。（橋本貴子）